

フリースクールでの SW 実践を考える③

高名 祐美

なおきくんは現在小学校3年生。集団の中で過ごすことが苦手のようなのである。「教室にはあまりいなかったよ。校長室によくいたんだ。」と話してくれる。

小学校に入学した当初は通学していたが、遅刻することが多くなり、学校に行かずに家で過ごす日が多くなっていった。そして、2年生の冬休み明けからは登校しなくなった。3年生になった今は、自分の好きな授業がある曜日だけ登校している。

フリースクールには、3年生になったこの4月から通ってきた。体験利用をした日に、「ここは楽しい！もっとここに居る。」と家に帰ろうとしないくらいに、気に入ってくれた。そして利用が始まり、ほぼ休まず週2回通ってくる。「フリースクール、楽しい！」と可愛い笑顔で感情表現してくれる。

自閉スペクトラム症と診断されているなおきくん。小柄で、口達者、長髪で（散髪を嫌う）イケメンくんである。興味があちこちにうつりやすく、ひとつのことを続けることはむずかしい。自分のやりたいことができるまで主張し続ける。お母さんの言葉をかき取りれば「空気が読めない子」。相手の感情を思いやることや、自分を押しやて人に合わせるのが苦手である。公園に向かってみんなで歩いているとき、突然立ち止まって動かなくなり驚いた。その一方でルールのむずかしいゲームを説明書を読んですぐに理解し、人に教えることができる。IQは高く、一度聞いたことはしっかりと記憶している。

<なおきくんと家族>

両親と保育園年長組の弟と4人家族。数年前（入学前）に家族で他県から移住してきた。この土地には両親ともに縁はない。なおきくんは「こんなところに来たくなかった。友達もいない」と話す。お父さんは、自営で環境に優しいグッズを作って販売している。現在の自宅は友人から譲り受けた古民家で、その家をエコ重視したリフォームを繰り返し替えている。その様子を動画に編集してYoutubeにアップしている。その再生回数はなかなかの数字だ。

お母さんは、ヨガの講師。自宅で教室を開いている。なおきくんは、お母さんのことをあまりよくいわない。「お母さんはすぐにイライラして怒るんだ」と。

弟は保育園児。なかなかやんちゃで世話がやけるらしい。なおきくんが家族のことを

語るとき、どこか寂しそうな表情をみせる。そんな家族と、海の近く、自然あふれる土地でなおきくんは暮らしている。「引っ越しなんてしたくなかったのに」とうつむいて言う。

<なおきくんにとってフリースクールという居場所>

フリースクールに特別決まったプログラムはない。子どもたちにやりたいことを聴き、管理者と相談しながらプログラムをつくっていく。なかなか決まらないことも多々。主体性を大切にしつつ、できること、できないことを伝えていく。

先日なおきくんの希望で、「クレープづくり」に取り組んだ。生クリームとフルーツを巻き込んだ甘いクレープをつくりたいと。つくるためにはどんな準備が必要か、材料はなにか、つくる手順はどんなものか。まず自分で調べて、スタッフと相談する。そんな打ち合わせを数回行った。そしていよいよ当日を迎えた。

その日はフリースクールの登校はなおきくんひとりだった。一人でもクレープをつくりたいとなおきくん。「ひとりで頑張る！」と意欲的で、いつもにもまして、テンションが高い。自分で作った計画に沿って、手順をすすめる。集中が持続できないので、手順を小刻みにする。そしてスタッフの声掛け・サポートで張り切ってクレープ 18 枚、焼き上げた。「見て、見て。僕が全部焼いたよ」と誇らしげにみせてくれる。

次は中身だ。生クリームを泡立て、大好きなイチゴとバナナと缶詰の黄桃をはさむ。早く食べたくてしょうがない。「ちょっとだけ味見していい?」「これ失敗したから、食べちゃおうか」と隙あらば口に入れようとする。「全部できたらみんなと一緒に食べよう」「みんなで食べると絶対おいしいよね」と何度も声掛け。作り上げるまで、食べたい気持ちもなんとか抑えることができた。

いよいよクレープが完成。仕上がりは少々不格好だったけど、スタッフとそろって試食して「うーん！最高！」と満面の笑みを浮かべる。私も笑顔になる。なおきくんとの関わりにむずかしさを感じたこと、管理者とぶつかったことが、吹っ飛んでいく。

そうだ、これなんだ。子供が笑顔になって、心地よさ、やりがいを感じる時間を過ごせる。「楽しい」と思える。そして次なるやりたいこと、自分の希望を語ること。それができる場所。そんなフリースクールを目指したい。

ソーシャルワーカーとして、地域につないでいきたいと焦っているのは私だと気づく。課題ばかりが浮かんでくるが、大切なのはなおきくんのことを理解すること、ここからだ。私となおきくん。フリースクールでの出会い。なおきくんが自分の強みを見つけ、フリースクールで成長していくことができるよう次のアクションを考えていこうと思う。